岩手大学大学院人文社会科学研究科紀要
第27号　2018年　6月　35頁～54頁

FTMトランスの「カミングアウト」における，可視化と受容のポリティクス

鈴　木　　綾

はじめに

セクシュアルマイノリティについての研究や社会運動は，1960年代頃に欧米で始まり，日本でも90年代頃から発展してきた。しかしそれらの動きは今日に至るまで，非異性愛セクシュアリティ，主にゲイを中心的な研究対象あるいは担い手として，進められてきている。カミングアウトに関する研究も同様で，英語圏においては1960～70年代以降徐々に増加し，日本においても近年研究が積み重ねられつつある。しかし，その調査対象は非異性愛セクシュアリティ，特にゲイの経験に基づいたものが多い。そのため，これまでのカミングアウト研究において，トランスジェンダーの経験と非異性愛セクシュアリティの経験は同一視され，トランスジェンダーが抱える固有の問題についてはほとんど議論されてこなかった。本研究では，5人のトランスジェンダー，特にFTM（トランス男性）のライフヒストリーへ注目したインタビュー調査を行い，彼ら／彼女らがどのような経験をしてきたのか，その経験においてカミングアウトにはどのような意味や機能があるのかを検討した。トランスジェンダーの存在が，カミングアウトをめぐる議論や社会運動の中で不可視化されたままであれば，トランスジェンダーの人々が抱える問題を社会で共有することは不可能であり，可視化／不可視化それぞれについてそもそも議論することも，トランスジェンダーのカミングアウトについて議論することもできない。本研究のインタビュー調査では，すでに一定程度可視化されているトランスジェンダーの人々がいたからこそ可能であった，調査対象者らのアイデンティティの形成過程と，彼/彼女らはなぜカミングアウトをするのか，カミングアウトをどのような行為であると考えているのかに焦点をあてた。

第１章　インタビュー調査

Ⅰ　調査方法，調査対象者の属性

セクシュアルマイノリティの存在は可視化されにくく，自身がセクシュアルマイノリティであることを他者に知られることを恐れる人も多くいるため，まず出会うこと自体に一つの困難がある。それは本研究が調査対象とするトランスジェンダーも，例外ではない。このような事情を考慮すると，量的調査を行うことは難しいと判断されるため，今回は対象を以下の表１に示す５人に絞り，質的調査を行った。この５人は，筆者の友人や，筆者が個人的に参加したセクシュアルマイノリティの自助グループで出会った人々である。

	インタビュー履歴	性自認	性的思考	年齢	職業	出身地	性別移行段階	初期の違和感	自認
Aさん	①2016年8月19日㈮@岩手 ②2016年9月19日㈰@東京	TG-FtM	㊊男子 ㊋(低)男子 (高)女子 ㊌どちらも ㊎バン	22	学生	北海道○市	改名、ホルモン治療、胸オペ	中2(14歳) (/幼稚園)	高2 (17歳)
Bさん	①2016年8月18日㈭@岩手 ②2016年9月23日㈮@岩手	TG-FtM	ヘテロ	27	公務員	岩手県△市	改名、ホルモン治療、胸オペ	3歳	高2 (17歳)
Cさん	①2016年12月5日㈪@岩手	TG-男性	～㊌バイ ㊎レズビアンではない 29歳以降 FIM ゲイ	55	支援員	秋田県◎市	改名、ホルモン治療、胸オペ	感じた事がない	高1 (16歳)
Dさん	①2016年11月14日㈪@岩手	FtM	同じ人(FtM)	53	福祉系 NPO職員	青森県×市	ホルモン治療(一時期)、通称使用	幼稚園年長 (5, 6歳)	36歳
Eさん	①2016年9月27日㈫@岩手	男女半々 /MtF	主に女性	50	公務員	岩手県◇市	女性装、通称使用 (共にパートタイム)	小4 (10歳)	38歳

＊職業、年齢、性別移行段階は、上記インタビュー時のもの
＊性自認、性的指向は本人の言葉による
○市:人口約17万人、製造業中心　△市:人口約10万人、サービス業中心　◎市:人口約8万人、漁業中心
×市:人口約28万人、サービス業中心　◇市:人口約11万人、サービス業中心

表１：インタビュー調査協力者一覧

実際のインタビューは，あらかじめいくつかの質問を用意した上で，それらについて自由に語ってもらう半構造化インタビューとして行った。予定していなかった話題がインタビュー中に出てきた際には，その話題についてもなるべく質問をしていった。

インタビューは筆者と調査対象者の一対一で，1回のインタビューの所要時間は90～120分程度に収めた。必要に応じて後日，インターネット電話サービスやメールなどを通して追加の聞き取りや質問を行った場合もある。場所は飲食店，筆者の所属する大学の研究室，対象者の自宅などで行った。

倫理的配慮として，インタビュー初回時には，本研究の趣旨や注意事項を記載した調査依頼状を配布して説明したのち，その内容に同意を得ている。そのうえで対象者に許可を得て，ICレコーダーにインタビュー内容の録音をとり，メモも取った。ここまでの調査方法は，三部倫子『カムアウトする親子』(2014) を参考にしている。

インタビューでは，①インタビュー中に使用したい名前②年齢③性別④性的指向⑤職業⑥出身地⑦家族構成⑧居住歴を必ず聞き取る内容として設定した。③と④に関しては「あなたの③④を，あなたの言葉で教えてください」というような形で質問をした。また，①で聞き取った名前については，個人の特定とプライバシーの保護のため，インタビューでのみ使用するものとし，アルファベット表記に変えて伏せる。⑥についても同様に，プライバシー保護の観点から記号に変えて表記している。

また，本研究が注目しているのはトランス男性であるFTMだが，調査対象者の中には1名のトランス女性（Eさん）がいる。Eさんを調査対象者としたのは，トランス女性であるEさんの経験とのトランス男性であるA～Dさんの経験を同時に扱うことで，トランス男女別の視点や経験を見いだせる可能性が生まれ，より広い視点からトランスジェンダーとカミングアウトをめぐる問題について考察できると考えたためである。

次節Ⅱでは，上述の方法で行ったインタビュー調査から明らかとなった，5人のライフヒストリーの概要について述べる。

Ⅱ　調査対象者のライフヒストリー

1　A さんのライフヒストリー

A さん（調査時 22 歳）は，「今思えば違和感だった」という事柄は多いが，幼稚園から小学校くらいまでは「なんとなく女性らしいものは避けたい」という気持ちがある程度で，中学生になる頃までは性別に対する違和感を実感することはなかった。

中学 1 年生の頃，同級生の女子生徒に好意を抱いた A さんは，「自分はレズビアンかもしれない」という思いに至った。当時はセクシュアルマイノリティに関する正しい知識や情報もなく，自分の悩みの根源がどこにあるのかを理解することができなかった。中学 3 年生になり，インターネットを活用しながらセクシュアルマイノリティに関する情報を収集するようになった A さんは，一人のレズビアン女性と知り合う。この女性とやり取りを続けていくうちに，この人物の「女の子が好き」という気持ちと A さんの「女の子が好き」という気持ちには，違いがあると感じるようになったという。

名前	A さん
年齢	22 歳
性別	トランスジェンダーの FTM
性的指向	パンセクシュアル[1]
職業	学生（大学 3 年）
出身地	北海道〇市
居住歴	～高校：実家（父〈60 歳，サラリーマン，車関係の会社勤務〉，母〈60 歳，看護師，皮膚科勤務〉，兄〈6 つ上，サラリーマン，車関係の会社勤務〉，犬） 大学～：一人暮らし

【A さん】

この子（レズビアン女性）とはなんか違いそうってなって「女性として女の子好きになってるわけじゃねえな」となって，「（自分の性自認は）中性？いやでも違う…」ってのを経由して自認が男性になったんでなかったかなあ。
（女の子として女の子を好きなのではないという感覚が）分かった瞬間は解放感みたいなものがあったよ。自分がだんだん判明していく感じが明るさみたいなのを感じさせた。

自身の性的指向や性別への違和感が，ジェンダー・アイデンティティに関わるものであると気付くことのできた A さんであったが，その事実を受け入れることは容易ではなく，「FTX か TV で止まらないかなみたいな気持ちはあった」と A さんは話す。

【A さん】

トランスに対して肯定的じゃなかったのは，親の期待感じてたからかなあ。父ちゃんは女の子としての自分を可愛がってくれてると思ってたし，母ちゃんもスカート履いてほしいとか髪伸ばしてほしいとかそういう親の理想みたいなものをすごく気にしてたからかなあ。それに背く

[1] 固定的なこだわりを持たず，あらゆる人が性的指向の対象となるあり方を指す。

自分は存在していいのか，嫌われはしないかみたいな。だからレズビアンとかTVだったら自認は女のままだから許されるというか言い訳できる？みたいな気持ちがあったかな。だから葛藤してたね。自分の気持ちに素直に生きたいしその方が快を感じていたのは分かってたけど，親から見放されるのではみたいな。

このような葛藤を抱えながらも性自認が固まりつつあり，性別に対する違和感からくる苦しさの限界に達したAさんは高校2年生のある日，兄と両親にカミングアウトすることを決意した。あっさり受け入れてくれた兄と父親とは対照的に，母親はショックを受けていた。

その後高校を卒業するまで家族（主に母親）とは度々衝突しながらも，相互に歩みよる努力を続けた。それから5年ほど経った今では，両親もAさんの生き方や選択に理解を示し，良好な親子関係が築かれている。

2　Bさんのライフヒストリー

名前	Bさん
年齢	27歳
性別	トランスジェンダー，FTM
性的指向	女性（ヘテロセクシュアル）
職業	公務員
出身地	岩手県△市
居住歴	～高校：実家（父〈53歳，小学校教員〉，母〈54歳，小学校教員〉，妹①24歳，妹②16歳） 高校入学後：少しの間（期間不明）下宿，その後実家（同上）へ戻る 大学入学後～：一人暮らし

幼い頃から明確に性別への違和感を感じていたBさん（調査時27歳）は，幼稚園に通っていた3歳の頃から「男になる」と周囲に伝えていた。しかし，「子どもの言うことだから」と周囲の大人たちは聞く耳を持ってはくれなかった。違和感を抱えた状態と，それを大人たちが理解してくれない状況は中学生頃まで続いた。その結果，Bさんは男子への「敵対心」や「嫉妬」，「劣等感」を感じるようになる。また，周囲の人間が誰も自分の気持ちを理解してくれなかったことで「誰といても孤独」だと感じるようになり，周囲の人に対して「心を閉ざした」。

【Bさん】

男はまあズルいなみたいな。最初からズルいな，なんだろう，何かスポーツができる人に憧れるような感じ。なんだろう。男の人たちは努力してないのにできてていいなみたいな。元から素質があるみたいな感覚でずるい。

（中略）言葉にできないけれども，自分が女子と扱われることのその羨ましい，男子に対して羨ましい，なんで女子に扱われているんだっていうのがずっとくすぶっていたわけで，あんまり言葉にできないけれどもそれもあったので，学級の男子とかと一緒に遊ぶんだけど無駄に敵対心を向き出すとかなんか，うん，負けないみたいな。喧嘩をしたり意味もなく後ろから蹴ったりとか，蹴って泣かせたりとか（笑）自分にはそういう意味があるというか理由がはっきりしてるんだけど，それを言えないし周りからしたらなんだこいつみたいな。問題児。ってこともあったかな。

（敵対心？）
うん。嫉妬。劣等感。自分にあるべきもの持ってる人，持ってるとか…持ってる。

小学校高学年の頃には，同級生たちと恋愛について話していた際，幼い頃から自覚していた「女性が好き」という気持ちが「レズだ[2]」とからかいの対象になることがあり，自分が女性に好意を抱くことは「隠さなければいけない」ことなのだと感じ始めるようになっていった。

中学２年生で第二次性徴が始まったＢさんは「身体にさえも裏切られた」と感じ，幼い頃から感じていた「男になる」，男になれるという思いを諦めざるを得なくり，「絶望を感じた」。

性別に違和感を抱える状態を自分自身でも受け入れることが困難だったＢさんは，そのような自分の事を性同一性障害という「障害」を抱える「恥ずかしい」存在であると感じていた。しかし，高校の部活動で出会った他校の「同じような障害の人」との出会いをきっかけに，自身の「障害を受容」することが徐々にできるようになっていった。それ以前は，トランスジェンダーの人物が執筆した書籍などを読むなどしていたが，そこで知った内容が「障害を受容」するきっかけにはなっていなかった。

【Ｂさん】
違う高校で同じような障害の人がいて，その人は自分を性同一性障害だっていうことをすごい言ってて，彼女を連れて歩いたりしてる感じで凄い格好良かったの。で，その人と話したりして自分も同じような障害かもしれないと相談した時があって，でもなんかこう（自分は）受け止めきれないっていうか，うん…って相談をしたら，なんか，「自分らしく生きたほうがかっこいいと思うよ」っていう言葉で，なんかそうだよなって，そこでストンと落ちたかな。

その後高校３年生になったＢさんは，養護教諭のすすめもあり家族へカミングアウトをするが，それ以降Ｂさんと家族との間には約10年にも及ぶ葛藤が生まれていった。

自分の「障害」や家族と向き合いながら，Ｂさんはホルモン治療や，胸を平らにする乳腺の摘出手術を経て理想的な身体，暮らしを獲得していった。大学生になり，これまで多くの人に支えられたことで「自分の障害を受け入れ」ることができたというＢさんは，今度は困難を抱える人々を支える側になりたいという思いのもと，社会人生活を送っている。

[2] 「レズ」という言葉はレズビアンに対する侮蔑的な意味を含むものであり，一般には使用を好まれないことが多いが，ここでは調査対象者のありのままの言葉，表現を使用する。

３　Ｃさんのライフヒストリー

名前	C さん
年齢	55 歳
性別	トランスジェンダー男性
性的指向	ゲイ（FTM を対象とする）
職業	支援員
出身地	秋田県◎市
家族構成	父（1914 年生まれ，102 歳，製造業関係会社員） 母（1918 年生まれ，98 歳，販売業店員） 弟①（1967 年生まれ，49 歳，工場のメンテナンス業） 弟②（1971 年生まれ，45 歳，工場のメンテナンス業） 父方の祖母 叔父が 1 人か 2 人 叔母が 1 人か 2 人 （家族ではないが，向かいに従弟 2 人とその家族が住んでいて，よく関わりはあった）
居住歴	3 歳までは両親と長屋に住んでいたが，今の家に引っ越し，上記の家族構成に。 転職による引っ越しで 25 歳から一人暮らしをするが，体調の悪化などで半分実家にいるような感じに。 51 歳の時に岩手県に引っ越し，同僚とルームシェアを始める

自身を，よく語られるようなトランスジェンダーと自分とは違うと考えるＣさん（調査時 55 歳）は，自身の性別に対する違和感のようなものを感じたことはないと語る。しばしばトランスジェンダーの語りに見られるような，身体に対する嫌悪感なども感じたことはなかったが，一方で，小学生の頃から自分が男か女かということは意識したことはなく，「性別はどっちでもいい」という感覚を現在まで持ち続けている。

小学校 6 年生の時，男子生徒からいじめられていたところを他の女子生徒から庇われたのをきっかけに，Ｃさんは「自分はこっち（女子）側なんだな」と，自分が「所属」している性別カテゴリーを実感した。そのときＣさんは，「女子に庇われるような立場なんだ」とショックを受けたという。

Ｃさんの自認に変化が起こり，性自認が固まるきっかけとなったのが，高校 1 年生の時の恋愛体験であった。同級生の女子生徒に好意を抱いたことで，自身の性自認や性的指向について考えることとなった。

【C さん】

自認が固まったのがー，高校生の時かなあ。高校 1 年生の時に好きな子ができて，それは女の子だったんだけども，そこで思ったのが，自分はレズビアンじゃない，と思った，女性として女性を好きなんじゃない，っていうのが自覚があった。

性別に対する違和感に由来する身体への嫌悪感はなかったものの，Ｃさんは自分自身の身体というものを長い間受け入れることができずにいた。Ｃさんは出生時鎖肛状態にあり，幼いこ

ろから手術を繰り返してきたため，今でもその身体的な困難は続いている。生活するうえで困難の多かった自分自身の身体をＣさんが長い間受け入れることができずにいたことは，Ｃさんの自尊感情にも大きな影響を及ぼしている。

身体的な困難は，23 歳頃に悪化してしまう。かつて恋愛感情を抱いていた友人の女性と喧嘩をし，その際にＣさんは勢いでカミングアウトをする。しかし，トランスジェンダーに関する情報がまだほとんど世に出ていなかった当時，友人は「何を言っているのか」理解できないという反応であった。このときの精神的なショックがきっかけとなって PMS を発症し，次第にその症状は悪化していく。PMS の症状の悪化や幼い頃からの手術の影響による身体的な困難は，ホルモン治療の開始につながった。そして男性ホルモンの影響で全身の筋肉量が増加した結果，これらの症状や困難は大きく軽減された。

男性ホルモンの投与を始めたＣさんは家族と職場へカミングアウトをし，男性としての生活や勤務をするようになった。のちに戸籍上の名前の変更と乳腺の摘出手術も行い，現在も男性としての生活を送っているが，PMS の発症や体調の変化というきっかけがなければ，「身体違和も薄かったし，女性として生きられるくらいの違和感」だったとＣさんは言う。

４　Ｄさんのライフヒストリー

名前	Ｄさん
年齢	53 歳
性別	FTM
性的指向	同じ人（FTM）
職業	福祉系 NPO 職員
出身地	青森県×市
家族構成	父（1932 年生まれ，昨年 83 歳で逝去，元小学校教員），母（1937 年生まれ，23 年前に 56 歳で逝去，専業主婦），弟①（1965 年生まれ，自動車整備士），弟②（1967 年生まれ，自動車整備士），父方の祖母（明治 43 年生まれ），父方の叔母 3 人（現在 70 代）
居住歴	高校卒業までは実家暮らし（その間叔母 3 人が結婚・離婚・再婚で出入りする） 高校卒業後，仙台で一人暮らし（大学進学の為） 大学卒業後に青森で一人暮らし（就職の為） 2012 年（49 歳）から岩手県で暮らす　（転職の為）

Ｄさん（調査時 53 歳）は，東北の「大昔からの農村漁村で家制度が旧態依然として」いて，「地域の掟みたいなもの」もある「多様性なんてあってはいけないような地域」で生まれ育った。

幼いころから周囲の人と自分は「違うな」という感覚を漠然と持っていたＤさんは，「自分だけ違う人種のように感じ」ていたため，どこに属したら良いか分からず，幼稚園や小学校は誰とも遊べず一人で過ごすことが多かった。

「男子のほうがいいのに」という気持ちを抱えながら過ごしていた小学校５年生の時，自分や周囲に第二次性徴が始まり，衝撃を受けた。周りの男子が徐々に男らしくなっていき，「道が別れた」感じがし，「そっちの世界にはもう入っていけない」んだと悟った。第二次性徴による衝撃を受け，自分の気持ちに「ふたをして」中学時代を過ごしたＤさんは，女子高への

進学を決める。

Dさんの生まれ育った地域では，女性が四年制の大学に進学することは婚期が遅れるため，あまり良いことだとされていなかった。福祉の道へ進むため，養護教諭の教員免許を取得するために四年制大学へ進学したいと考えていたDさんは，高校の担任や祖母と衝突したが，Dさんの強い決意と母親の後押しもあり，四年制大学への進学を果たした。大学では，高校から始めた空手やアルバイトに打ち込み，多くの時間を男子学生と過ごした。男子と過ごす時間は，Dさんにとって心地よいものだったという。

それでも自分の気持ちにふたをしたまま，Dさんは社会人となった。介護士として働いていたDさんは，社会に出ると性別役割の押しつけが多いと感じ，仕事がうまくできなくなることなどが増えて悩み，次第に精神状態も悪化していった。

36歳の頃，ある時突然「脳みその奥で叫ぶ自分」に気が付き，「やっぱり性別（に悩みの原因があるん）だ」と思った。自分の抱える困難の原因がどこにあるか理解したDさんは，性別に違和感を感じているのに，あくまでも女として「女の世界」に適応していかなければいけないという，これまでとは異なる苦しみを感じることとなった。女性職員たちとの感覚や価値観の違いから，「女の世界」に適応することもできず，職場の人たちともうまくコミュニケーションがとれなくなっていったが，その理由を上司や職場の人に告げることはできなかった。

その2年後，偶然新聞でLGBTという言葉やセクシュアルマイノリティを題材にした芸術イベントの開催を知ったことをきっかけに，セクシュアルマイノリティについての知識や情報を集めていくようになった。現在はNPO団体で職員として勤める傍ら，「使命を感じ」，セクシュアルマイノリティの当事者団体などで啓発活動等に尽力している。

5　Eさんのライフヒストリー

名前	Eさん
年齢	50歳
性別	女男半々（気分によって割合が変わる。MtFという言葉も自分に合っていると思うので，セクシュアリティを言う時はいつもはMtFという。）
性的指向	女性を好きになる事の方が多い
職業	公務員（高校教員）
出身地	岩手県奥州市
居住歴	～大学：実家（父〈81歳，自営業〉，母〈81歳，専業主婦〉，弟〈46歳，公務員〉） 就職～：一人暮らし

今回の調査対象者の中では唯一のトランス女性であるEさん（調査時50歳）は，自身のことを「女男半々。気分によって割合が変わったりもするし，MtFという言葉も自分に合っているように思う」と説明する。

テレビ番組に出演する女性タレントのキラキラした衣装に憧れ，「女性になりたい」という気持ちをわずかに抱きつつも，小学校までを「インドアな子ども」として性別に捕らわれず過ごしたEさんの環境は，中学入学以降一変する。それまでは男女の垣根がなかった生活は，制服や体操着，男子部/女子部と別れた部活動の人間関係の影響で，男女が二分されるようになった。男子として過ごしていたEさんは，「自分の立ち位置はこっち（男子）じゃなくて向こう（女子）のほうがいい」とはっきり感じた。また，第二次性徴が始まると，女子生徒の身

体の変化が気になるようになった。しかし，そのような気持ちや女子への関心が，大きな悩みとなることはなかった。

Ｅさんは，自身が学生時代に性別のことで大きく悩まずに過ごすことができたのは，「時代」の影響があると考えている。

【Ｅさん】

性別の一線を越えて向こう側に行くということができる時代ではなかったので，考えられる時代ではなかったので，そういう，今であれば，今私が高校生とか大学生であれば，本当にその境目を乗り越えて向こう側に行くことが現実感をもって考えられるじゃないですか。そういうこと，そういう現実感をもって考えられる時代じゃなかったのね。だから，現実を受け入れるのが普通だと思ってそれが悔しいとも思わなかったし，辛いとも思わなかったし，そういうもんだと思ってただけ。

しかし，Ｅさんのトランスジェンダーに対する認識は決して良いものではなかった。Ｅさんが高校生の頃，ニューハーフと呼ばれる人たちの存在が知られるようになった。Ｅさんにとってのニューハーフは，「夜の酒場や水商売にしか居場所がない」人たちであり，「日常の中での存在とは思えなかった」。

1990 年代後半から，Ｅさんはインターネットの掲示板を通してニューハーフ以外の「性別の一線を越えて向こう側」に行く人たちの存在を知るようになる。そこで出会った人たちは，「性別違和があることを卑屈に捉えず」「普通の会社員」などとして生活していた。そのような人たちの存在に衝撃を受けたＥさんは，掲示板で知り合った一人のトランス女性と実際に会う約束をする。実際に会うにあたって，Ｅさんは自分の経験や性別違和をこのトランス女性に事前にメールで伝えており，これがＥさんにとって初めてのカミングアウトとなった。

第２章　インタビューから読み取れるトランスジェンダーの特徴

前章で述べた調査の結果，５人の調査対象者の語りからは大きく３つの特徴を見出すことができた。それは①違和感を感じてから自認に至るまでの長いブランク②オープンとクローゼットの境界の複数性③カミングアウトがもつ周囲との関係性の調節機能である。

Ⅰ　違和感から自認までのブランク

ブランクが空く理由として考えられるのは，セクシュアルマイノリティについての正しい情報の少なさ，男女二元論的なジェンダー規範に基づいた異性愛主義の浸透による性的指向の問題との混同，自己受容の困難さであった。

ここで特に注目したいのは，性的指向の問題である。これまで周知されてきている通り，性的指向と性自認はそれぞれ異なる問題である。従来，この二つを関連付けて同時に扱うことは避けられる傾向にあったが，今回の調査においては，調査対象者たちから性的指向や恋愛体験についての語りが多く聞かれた。

たとえばＡさんとＣさんの場合は，性的指向の対象がどのような人なのかを理解することが性自認の確立へ結びついている。しかし，性的指向のあり方を自認するまでにも時間がかかることもあり，性的指向も性自認も確立させられないという状況になれば，周囲や社会からの疎外感を感じて不安な思いをし，より一層自身の性的なアイデンティティを自分自身で受け入

れることが困難になると考えられる。

Ⅱ オープンとクローゼットの境界の複数性

二つめの特徴として挙げられたのは，簡単に二分することのできないカミングアウト/クローゼットの境界の複雑さである。いつどこで誰にカミングアウトするかは個人の人間関係と密接に関わっている。彼ら/彼女がカミングアウトをする時には，今後相手とより親密になりたいか，関係を継続していきたいかというような人間関係が重視される傾向にあった。周囲の人間全てにカミングアウトしたり，トランスジェンダーであることをオープンにして生活するわけではないため，その結果オープンとクローゼットが明確に二分するようなことはなく，その境界線は複雑に入り組んでおり，従来二項対立的に扱われてきたオープンとクローゼットのあり方とは異なる事実が伺えた。

それに伴い，どのような状態で生きることが「本当の自分」でいることになるのかという問いが生じた。カミングアウトして生きることを「本当の自分」と捉える者もいれば，あくまでも男性/女性として生きること「本当」だと捉える者もいる。後者の考えを持つ者にとっては，セクシュアルマイノリティやトランスジェンダーの存在，その生き方などが公にされることは自身の生活が脅かされることにもつながる。セクシュアルマイノリティの可視化を推し進めるアクティヴィズムの中では，このような考えを持つトランスジェンダーの存在はほとんど考えられておらず，トランスジェンダーがアクティヴィズムの中でいかに不可視化されているかが示されているといえる。

Ⅲ カミングアウトがもつ周囲との関係性の調節機能

カミングアウトは権力への「抵抗」か「解放」かと，政治的な行為として語られがちな一方で，実際には政治性よりも身近な人間関係のあり方を重視したカミングアウトが行われていることが，明らかとなった。この「関係性の調節」には，「親密さの調整」と「プライバシーの秘匿」という２つの側面が見られた。

「親密さの調整」を重視したカミングアウトは，金田智之が指摘するように「これから形成していきたい，あるいはこれから維持していきたい人間関係の質いかんによって為されるか否かが左右され」，「本人がより良いと望む関係性を構築するために用いられる道具に近いものとして存在している」（金田 2003）。

もうひとつの「プライバシーの秘匿」の側面については，レズビアンであることを公にし，『「レズビアン」である，ということ』（1992）の著書がある掛札悠子の議論を参考にする。掛札はカミングアウトを「プライバシーを守る方法を手に入れる手段」であるとし，カミングアウトすることで「当然のごとく『異性愛者』とみなされ，あつかわれ」，「『同性愛者』として日常を生きることを疎外されること」に抗議することができるようになると述べる。その結果，「レズビアンとしてのプライバシーを傷つける」異性愛者の振る舞いから自分を守ることができるという（掛札 1992）。

Ａさんが高校２年生で初めて友人へカミングアウトをした時，そこには「大切な人だから知っていて欲しいと思った」という思いのほか，「（自分のセクシュアリティを）知って，適切な付き合い方をして欲しい」という気持ちがあった。Ａさんのカミングアウトの動機は，まさに掛札のいう「『異質な存在』への適切な対応を求める」ためであり「プライバシーを守る方法を手に入れる手段」として，カミングアウトをしたといえる。

以上のような特徴をもつライフヒストリーをおくるトランスジェンダーにとって，カミング

アウトという行為には，他のセクシュアルマイノリティとは異なる，どのような意味や機能があるのだろうか。次章において，この点を考察する。

第３章　考察

Ⅰ　インターネットによる「親密さの調節」：オープンでもクローゼットでもなく

Ａさんと Ｅさんは，自分のジェンダー/セクシュアリティと向きあったり情報を集めるために，インターネットを駆使していた。また，インターネット上で知り合った人物と実際に会うなどの形で交流を深めることもしていた。

インターネットが普及したことにより，孤独感や不安から救われ，人とのつながりを持てたマイノリティは多く存在する。実際，SNS や出会い系サイト，アプリを利用しているセクシュアルマイノリティは多い。

インターネットは匿名性が高く，現実世界（＝リアル）とは異なる別世界（＝ネット）のように思える。しかし実際には，Ａさんや Ｅさんのようにネットで知り合った人と実際に交流を持つ人も少なくなく，リアルとネットが独立した二つの世界であるとは言えず，人によってはその両方の世界を行き来する場合もある。

他のセクシュアルマイノリティにも増して，トランスジェンダーの人がインターネットを利用するメリットには，外見のコントロールが可能な点にあると考えられる。インターネットの中では，自ら公開しない限り基本的には顔や声，体つきを隠して他者と交流することができる。つまり，シスジェンダー・異性愛中心主義的に解釈されてしまう身体というものを相手に曝すこと抜きにはスタートできない現実の世界では，常に自分のジェンダー/セクシュアリティが適切に相手に理解されるか分からず，不安なままカミングアウトし，その結果，適切に理解されないこともあるというカミングアウトのリスクも抱えることになる。それに対し，身体を曝さずに自分のジェンダー/セクシュアリティへの適切な理解を相手に要求できるネット上では，相手が理解してくれたと確信を持ててはじめて，現実でも相手との関係性をもてばよいという選択がうまれるため，「本当の自分」として他者との関係性を構築することが容易であり，関係性がインターネット上から現実に移行したとしても「本当の自分」は継続される。インターネットは，トランスジェンダーにとってストレスの少ない，ある種心地良い空間として存在していると考えられる。

一方で，ウェブサービスの一つである Twitter を見てみると，自身の顔や声，体系などを自ら公開し，積極的にカミングアウトを行なう，主に若年のユーザーの姿も見える。Twitter を利用するセクシュアルマイノリティには，「セクアカ」や「セクマイアカウント」などと呼ばれるアカウントを所持している場合が多く見られる。これらのアカウントは，同じセクシュアリティやセクシュアルマイノリティの人々と繋がることのみを目的としており，現実の友人と関わりを持つためには多くの場合用いられることがない。自身のアカウントのプロフィール欄には，性的指向や性自認，恋人の有無や交際期間，トランスジェンダーの場合は医療的な治療を開始した時期などが記載され，アイコンには，画像加工が施された自身の顔や身体の写真が設定されている。医療的な治療を受けているトランスジェンダーの中には，ホルモン治療に声の変化や体つきの変化，手術を受けた場合は，術前と術後の様子などを動画や写真で投稿する者もいる。

このようなネットの利用の仕方がみられるのには，治療や制度に関する情報を共有していこうとする意図もあるだろうが，それよりも大きな意味を持つのは，自分のアイデンティティへ

の影響であると考える。現実に存在している自分の一部分とジェンダー・アイデンティティなどを公表することで，日常生活では明らかにすることのできない「マイノリティなセクシュアリティを持つ自分」の存在を「自分を真に理解出来る（してもらいたい）」と感じる他者から，自分が望むような形での認識をしてもらうことが可能となり，セクシュアルマイノリティである自分の存在を認めるうえで，重要な役割を担っていると考える。このような，インターネットを介した情報の収集や人との出会いや，コミュニケーションの仕方は，新たな形での「親密さの調整」がなされていることを示唆するものであるといえる。

さらに，セクシュアリティや悩みの現状を赤裸々に発信するユーザーの存在は，テレビなどのマスメディアに登場するセクシュアルマイノリティの存在を「自分とは関係ない違う人間だ」と感じるような者にとっては，孤独感や不安の軽減，ロールモデルの獲得にもつながると考える。インターネットを利用することによって，どの世代でも簡単にセクシュアルマイノリティについての正しい知識や情報を知ることや，自分と同じような悩みを抱える人の存在をより身近でリアルに感じることができるようになることは，前章Ⅰ節で指摘したような，自身の性的指向やジェンダー・アイデンティティについて悩む人々の葛藤の時間を，短縮させることが可能になると考える。

また，セクシュアルマイノリティが閲覧するサイトやサービスの内容にも，興味深いものがある。1960年以降，男性同性愛者を中心としたセクシュアルマイノリティの人々は，ゲイ雑誌の文通欄のような紙面を通し，情報の共有や悩みの相談，人間関係の形成などを試みていた（前川 2017他）。紙面を通したセクシュアルマイノリティの出会いは，特に男性同性愛者においては主に恋愛や性的な関係のパートナー探しが中心となる傾向があった。しかし，インターネットを介した交流が盛んになってからは，このような非対面形式におけるインターネットという交流の場の利用目的に，トランスジェンダーと非異性愛セクシュアリティの間に差異が生じてきたように思われる。三橋順子の指摘によれば，1994年頃から設立されはじめた，実在する女装サロンが運営・管理するインターネットサイトをはじめとする「トランスジェンダー系インターネットサイト」は，孤立していたトランスジェンダーたちをつなぐ役割を果たしていた（三橋 a 2003：p116-117，三橋 b 2003：p122-123）。しかし，現在あるトランスジェンダーの人に向け公開されているインターネットサイトでは，性別移行に必要な技術や医療情報など，実用的な情報を発信するものが多く感じられる。その一方で，男性同性愛者を中心とする非異性愛セクシュアリティに向けられたインターネットサイトやサービスは，依然性的なコンテンツや，パートナーを探すことが目的となっている印象を受ける。

同じインターネットという手段を用いていても，非異性愛セクシュアリティとトランスジェンダーとではその使用目的や意図が異なっている，つまり，欲している情報，可視化されておきたいと思う情報が異なっているのではないだろうか。

たとえばトランスジェンダーの人が運営するコンテンツの場合，ホルモン治療や手術についての価格，工程，副作用，感想について述べられたものが多い一方で，それと比較すると，具体的な病院名や医師を公表したり，手術の傷跡を見せるようなものは，そこまで多くないように思われる。このような情報量の差を検討していくことで，トランスジェンダーが可視化を望むものと望まないものとの違いが見えてくるのかもしれない。

Ⅱ　トランスジェンダーのカミングアウトにおけるプロセス性

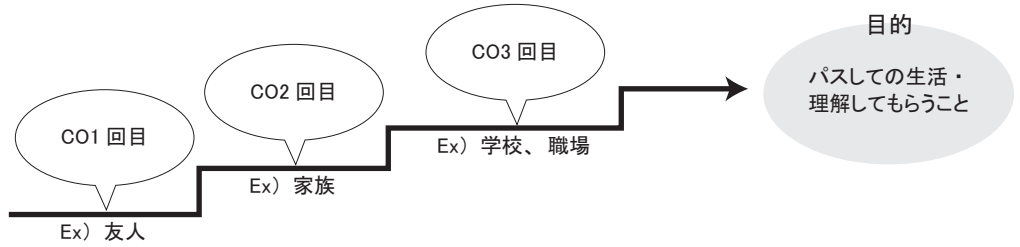
カミングアウトは，それが一度きりで終わる行為ではなく，人生の中で幾度となく繰り返していく必要のあるものだと，しばしば言われている（Vincent ら 1997他）。児童向けに書かれ

たものではあるが，カミングアウトとはどのようなものか，どのようにカミングアウトをして人間関係を形成していけば良いのかを示した書籍に『わたしらしく，LGBTQ② 家族や周囲にどう伝える？』がある。同書によると，人権団体であるヒューマン・ライツ・キャンペーン（HRC）は，カミングアウトを「自分自身を認めること」，「カミングアウト」，「オープンにくらす」という三つの段階で構成する（ロディ，ロス 2017）。「オープンにくらす」というのは，セクシュアリティを周囲の人に公にした状態で生活する，ということである。つまり，カミングアウトなしではオープンに生きることは不可能ということだ。この，HRC やロディらが示すようなカミングアウトは，言い換えるならば「オープンにくらす」という目標の達成へ向かう「ステップ型」の方法であり，プロセス性のある，「一度きり」ではないカミングアウトのオーソドックスなイメージではないだろうか。

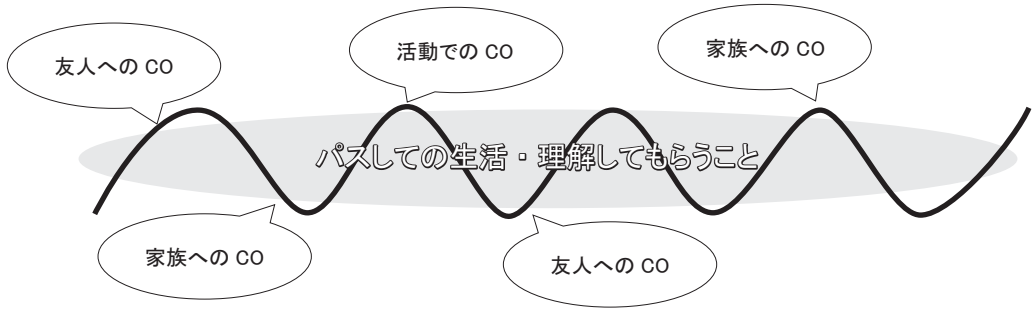
しかし，本研究の調査からみられたカミングアウトは，このようなプロセス性とは異なる形が見られた。ただし，「ステップ型」のようなカミングアウトが全くなかったわけではない。結果的にステップを踏んでいるように見える語りもあるが，そのステップの踏み方も，一段ずつ，というような形ではなく，何段か飛ばしながら登っていく，というような形であり，それが行われていたのは性別移行前に限られていた。

性別移行後の彼ら／彼女らのカミングアウトは，既に目的が達成された生活の中で，必要に応じて行われている。それは必要に迫られているのではなく，したいかしたくないか，という判断基準の元に行われていた。そのため，「ステップ型」のように，それぞれのカミングアウトになんらかの関係性があるわけではなく，それぞれ独立した単一のカミングアウトであった。図に表すと次のようなイメージになる。

●プロセス的なカミングアウトのイメージ



●インタビューに見られたカミングアウト



図：カミングアウトのイメージ　筆者作成

プロセス性があろうと，単一的であろうと，カミングアウトをする機会が続くかもしれないという点では，確かにカミングアウトは何度も繰り返される終わりなきものかもしれない。しかし，性別移行が望む程度まで終了し，カミングアウトの必要性がほとんどなくなったトランスジェンダーの場合，「したい」と思うことがなければカミングアウトをする機会は全くなくなる。その場合，カミングアウトは「幾度となく繰り返され続ける」ものから，「何度も繰り返せばいつか終わる」行為へと変わるのかもしれない。

Zimmanによると，トランスジェンダーの場合，性別の移行が終わったあともトランスジェンダーであること，性別を移行したこと，男性/女性であったことを自身のアイデンティティの重要な一部として考える者もいれば，それはもう過ぎ去った「過去のこと」であると考える者もいる（Zimman 2009：p57）。

たとえば，ゲイやレズビアン，バイセクシュアルの場合，一定のアイデンティティの形成プロセスを経て，非異性愛セクシュアリティ「である」という認識に至れば，一度受容されたアイデンティティや，そのアイデンティティを表明する機会は継続していく。

一方でトランスジェンダーの場合，長い時間をかけてトランスジェンダーであるという自認に至ったとしても，一度受容されたはずのアイデンティティが「過去のもの」となる場合，「トランスジェンダーである」というアイデンティティそれ自体も「過去のもの」になり，カミングアウトをする機会や必要性には「終わり」が来る。つまり，トランスジェンダー「である」というアイデンティティさえも，引き受け続ける必要はなくなるのだ。

このように考えると，私たちはこれまで，セクシュアルマイノリティの人々はそのアイデンティティをほぼ永続的に引き受け続けるものである，と思い込んでいたことに気づく。だが，これまでゲイ・スタディーズが訴えてきたように，「個人的なことは政治的なこと」というテーゼにのっとり，男女二元論や異性愛主義を乗り越えるために，セクシュアルマイノリティのカミングアウトが必要だと訴えるということは，セクシュアルマイノリティに対して「マイノリティで居続けなければいけない」ことを強いていることにもなる。性的指向もジェンダー・アイデンティティも誰かに強制されるものではなく，また，誰かに指示されて表明するものでもない。「可視化」される必要があるとしてセクシュアルマイノリティに関する様々な運動などが行われているが，そこでは「不可視化されたい」トランスジェンダーの存在が見落とされている。

カミングアウトを政治的なものとして積極的に価値を見出し，カミングアウトすることを義務であるかのようにセクシュアルマイノリティに課すことは，男性でありたい，女性でありたい，二元論にとらわれない存在としてありたいなどという，トランスジェンダーの個人としての意志を無視して無理やり可視化させ，苦痛に曝すことになる。それだけでなく，カミングアウトを義務のように迫ることは，非異性愛セクシュアリティやトランスジェンダーとしての自認をもつ者個人のアイデンティティをも，強制的に苦痛に晒す。

確かに，私たちが抱える問題には，社会や政治と無関係なままには語れないものが多くある。トランスジェンダーやその他のセクシュアルマイノリティに関する問題もそうだろう。セクシュアルマイノリティの抱える困難が改善，解消されるためには，可視化を訴える運動や声が必要なこともまた事実ではある。だが，吉澤夏子が「個人的なものの領域」について指摘するように，何もかもが政治的とされてしまうような現実や，そのような現実世界のみを生きなければならないということもまた，「ありえない」（吉澤 1997：pⅲ）。私たちには，カミングアウトして差別や苦痛と闘い続ける世界に繰り出していく選択肢だけでなく，カミングアウトせずに「『個人的なものの領域』を個人的なままにとどめておく，という選択」（吉澤 1997:

p19）も，残されていて良いはずである。

Ⅲ　カミングアウトにおける政治性の使い分け

これまでカミングアウトは，政治的な意味を持つ「抵抗」か「解放」か，それとも政治とは一線を置いたところにあるものなのか，長きにわたり議論されてきた。本研究の調査対象者はカミングアウトについて，それぞれ以下のように語る。

【A さん】
（カミングアウトってなんだと思う？）
「（カミングアウトは）全てを知って欲しいと思う相手に対して行う行為だと思う。大事だなと思う相手と距離を深めたいなと思う時にするものかな。」

【B さん】
「（カミングアウトは）自分が生きやすくなるための手段。必要がないなら言わない。」

【C さん】
（自身がトランス男性であることは，他者に対してはどうしたいと考えていますか）
「ケースバイケース。生活に影響を与えないなら知られても良いが，働くことの障害になるなら知られたくない。カミングアウトしたりオープンにするのは，生活を維持できるかどうかに関わってくる事。」
（カミングアウトは，どんなものだと思いますか）
「セクシュアルマイノリティが存在することを可視化する手段。」

【D さん】
（カミングアウトは，どのような時にしますか）
「その人とより関係を深めたいと自分が望んだ時」

（カミングアウトをする時は，自分とカミングアウトされる側の，どのような状態になることを望んでいますか）
「お互いの関係がより深まること」

（「カミングアウト」とは，どのようなものだと思いますか）
「自分を理解してほしいという意思表示，理解のいらない人にはしない。」

【E さん】
「カミングアウトは，してもいいけど，今自分がいるコミュニティや築いてきた人間関係が壊れるならしたくない。」

5 人の語りから共通して見られるのは，カミングアウト「してもいい」と思う場合と，そうでない場合があるということ，つまり，全ての人，あらゆる場面においてカミングアウトをする必要はないと考えていることが伺える。

「してもいい」と思う時，彼ら／彼女らは他者に対して，もっと親密な関係になりたいとい

う思いや，理解して欲しいという思いを抱く。前章 Ⅲ節で述べたように，カミングアウトには「関係性の調節」を行う機能があり，5人はカミングアウトをすることで，まさに「関係性の調節」を行おうとしていた。カミングアウトを「してもいい」と思う相手は，「これからも人間関係を継続させていきたいか否か」（金田 2003：p72-75）という，「抵抗」や「解放」という政治性とは離れた，個人的な選択基準によって判断されている。

また，もう一方のカミングアウトを「してもいい」と思わない場合には，2つの考え方が読み取れる。カミングアウトが「必要ない」と考える場合と，「知られると困る」場合だ。カミングアウトが「必要ない」ことがあると想定しているのは，B さんと D さんである。B さんがこれまでにカミングアウトを「必要」としたのは，好意を抱いている相手に告白をする時，自分の「障害」を受け入れて次の段階（治療など）に進もうとする時，就職活動の時，「女性らしさ」を強要してくる祖母を回避したいと思った時などである。これらのカミングアウトは，B さんの言葉を借りれば「自分が生きやすくなるため」，周囲の環境を整えるような目的で行われていた。B さんの言葉を借りれば「手段」，金田の言葉を用いれば「道具」（ibid. p75）としてしてのカミングアウトである。また，D さんのカミングアウトも「理解」を図るために行うという側面があり，その点を考えれば，D さんのカミングアウトも「手段」や「道具」であると言えるだろう。

もう一つの「知られると困る」場合があるという考えが見られるのは，C さんと E さんである。C さんの場合，彼が危惧しているのは生活の安定が保たれるかどうかであり，E さんが懸念を示すのは，人間関係が破綻しないかということであった。

E さんの懸念というのは，「これからも人間関係を継続させていきたい」と思う故に生じるものであり，「プライバシーの秘匿」や「親密さの調整」といった「関係性の調節」を考慮したものであるため，これは金田が指摘するような，政治性とは離れた個人的な選択としてのカミングアウトだと言える。それに対し C さんが危惧する問題は，「人間関係」とはまた違った労働をはじめとする社会生活に関するものである。ここまで見てきた「人間関係」が社会生活とまったく無関係なものだというわけではないが，会社などの労働の場は，様々な社会性や政治性が複雑に絡み合った組織であり，これまでのカミングアウトの語りに出てきた「人間関係」とは，また異なった集団であると考えることができる。C さんは，カミングアウトという行為自体については「セクシュアルマイノリティが存在することを可視化する手段」であると考えており，セクシュアルマイノリティの存在やカミングアウトとの政治的な関係が意識されている。また，自身がトランス男性であることも「生活に影響を与えないなら（他者に）知られても良い」と考えており，C さんのカミングアウトに「人間関係」という個人的な関係を考える尺度はない。

ここまで調査対象者のカミングアウト観を見てみると，C さんのカミングアウトには政治性が絡んでおり，それ以外の 4 人のカミングアウトは政治性と関係ないところで行われる，という結論に至る。

しかし，カミングアウトに対する視点をもう少し広げてみると，また違う答えが見えてきた。調査対象者の 5 人は，それぞれ様々な形でセクシュアルマイノリティの存在を社会に伝えるための活動を現在行ってる，もしくは過去に行っていたことがあった。A さんはインターネットを使ったブログでの情報発信，B さんは地域での掲示物等を使った啓発活動，C さんは自助グループの設立，D さんは自助グループの活動への参加や，イベントのボランティア，E さんは学生や医療関係者に向けた講演会の経験がある。

彼ら／彼女らの活動に対するモチベーションや考え方は，以下のようなものである。

【A さん】
（ブログ始めたのってなんで？）
「自分と同じような人と繋がりたいってなったからかなあ（中略）お互いの悩みや状況を共有して分かち合いたいみたいな」
（なるほど。誰かのため，っていうのは全然ない？）
「あー，ブログはそういう意識も多少あったよ！自分と同じように困ってる人がいたらそのひとつのケースとして参考になればなと（中略）自分がブログで見てた人達に，勇気付けられたり実際に生活するのに参考になったりしたからねえ。自分もそういう一部になりたかった」

【B さん】
（活動をすることによって，自分のセクシュアリティなどが明らかになってしまう可能性については，困るだとか嫌だとか思わないんですか?）
「思ってたらやらない（笑）」
（じゃあそれによって全然知られたくなかった人に知られてしまったとしても仕方がないか位？）
「うーん，知れ！みたいな。むしろ知れみたいな。本当はもっと広げたりとかやりたいなと思って始めたわけだけど，実際にやってみたりいろんな人と関わっていくうちに，なんていうか，やる気が失せたっていうか（笑）　なんかちょっと話ずれるんだけど，なんか，ビジョンはあったんだけど，なんか俺やんなくて良いんじゃない？みたいな。ふうに，やったからこそ思ったの。なんか当事者から岩手でそんなことするんじゃねえ，余計なお世話なんだみたいなことをやる前から言われたりとかもあったから，なんでこんなこと言われなきゃいけないんだろうみたいな（笑）なんかそういうふうに追い風[3]が強い中で無理にやらなくていいんじゃないのって思ったかなぁ。あまり楽しいって思えないならやらない方が良くない？みたいな。思ったから…楽しいことをやろうって思ったから，もういいや今はみたいな感じ。」

【C さん】
（自助グループを立ち上げよう，情報の発信や啓発などの活動に携わろうと考えた理由を教えてください）
「トランス情報を入手したり，自分と同じように感じている人達に会いたいと思い，東京の当事者が集まるイベントに行ったとき，全国から当事者が集まっていた。東北内の当事者にも会えたから，秋田で当事者がつながれる場がほしいと思った。もう一つは個人より団体の方が，社会に働き掛けるときに話を聴いてもらえると思ったからで，住みにくい秋田を変えるには一人の力だけでは無理だと思った。」

【D さん】
（イベントのボランティアに参加しようと思ったり，今でも LGBT に関する情報発信や啓発活動に携わっているのはなぜですか）
「役割や使命みたいなものを感じるから。」

---
[3] インタビューママ。向かい風の意だと思われる。

【E さん】

(講演をすることで，ご自身のセクシュアリティが知っている人に知られてしまうかもしれないということは考えませんか)

「あー，ないといったら，ないことはないです。去年なんかもね，かつて勤務していたところの人から『E さんじゃないですか』(と言われたりすることがある)(笑)　(そういうことがあると)どきっとして，まあ，ないほうがいいんだけど，そういうのは。ない方が気持ちとしては楽なんですけど，でも別に，そうだからといって，嫌ではないというか。っていうのは，やっぱり(話す相手が)医療に関する人たちなので，あまり嫌悪感はないんですよ。なので，いいお話でしたとかって言われるから(笑)　まあ嬉しいなと思うんですけど。それがね，どっか別な場所で『え～E さんじゃないですか？(笑)』とかみたいな反応をされたら嫌です，いやですけど。」

調査対象者たちは，自身がトランスジェンダーとして，セクシュアルマイノリティとして生きてきたことやその経験，セクシュアルマイノリティの存在を社会に伝えていかなければいけないという「使命感」や，知って欲しいという気持ちを持って活動に関わってきていた。これは，トランスジェンダーやその他のセクシュアルマイノリティの存在，セクシュアルマイノリティの人々が抱える困難は社会に認知されるべきである，社会には知る義務がある，という主張である。つまり彼ら/彼女らは，自分自身をはじめとするセクシュアルマイノリティの存在には，何らかの社会的，政治的な関係性があるということを少なからず認識しているのだ。さらに，それぞれの活動の場でカミングアウトをすることについては問題としておらず，カミングアウト「してもいい」と考えている。これらのことから考えられるのは，個人が行うカミングアウトには，政治性が意識されて行われるものと，政治性とは一線を引いたものとが共存し得るということである。

これまでカミングアウトは，政治的なものか否かということが議論されてきた。しかし本研究の調査から見えてきたのは，カミングアウトが政治的なものか否かという二分された考え方ではなく，政治性の有無は場面によって意識的に使い分けられているということであった。

このような政治性の使い分けは，トランスジェンダーのみに言えることではないかもしれない。運動や啓発活動に顔や名前を明らかにしながら積極的に参加する一方で，身近な人間関係においてはカミングアウトをしない非異性愛セクシュアリティの人を，筆者自身知っている。だが，同じように政治性を使い分けていたとしても，非異性愛セクシュアリティとトランスジェンダーの間には，やはり可視性をめぐって大きな差異が生じるのだ。

非異性愛セクシュアリティは，ほとんどの場合，その外見からはマイノリティ性が知られることはない。その一方でトランスジェンダーは，すでに指摘したように，外見的にもジェンダーロール的にも，「中途半端」な状態になってしまい，可視化されてしまう時期を避けることができない。つまり，マイノリティ性が明らかになりやすいトランスジェンダーの場合は，否応なしにその存在が政治的なものとされてしまう可能性があり，沈黙を貫けばほぼ確実に自分の意志のみで政治性から逃れられる非異性愛セクシュアリティと比べ，アクティヴィズムに巻き込まれやすい状況に置かれる。また現代においては，トランスジェンダーは非異性愛セクシュアリティに比べ，医療という巨大な権力との関係が密接な状況にある。存在の可視性と医療との密接さゆえに，トランスジェンダーは，より権力や政治性への関心の高さを求められやすく，政治的なアクティヴィズムの犠牲へと引きずり込まれてしまう。

このような意味において，本研究の調査協力者のカミングアウトに対する語りは，悪く言え

ば煮え切らないものであるが，しかしその煮え切らなさ自体が，セクシュアルマイノリティの中でもより周縁化されたトランスジェンダーの状況を，指し示していると言えるのではないだろうか。

おわりに

本研究では，トランスジェンダーの人々へのインタビューを通し，彼ら/彼女らの経験においてカミングアウトにはどのような意味や機能があるのかを考察することで，トランスジェンダーにとってのカミングアウトとはどのようなものなのかを検討した。結果として，彼ら/彼女のカミングアウトには，周囲の人間との関係性を調節する機能があり，それはインターネットの活用を通して新たな段階へと移行しつつあることが指摘された。また，これまで経験を混同して語られがちであった非異性愛セクシュアリティのカミングアウトとの大きな違いとして，その「プロセス性」の違いを見出すことができた。しかし，カミングアウトにおける政治性の有無については，時と場合によって異なる，という指摘に留まる。しかしこの，いわばはっきりとはしない答えこそが，トランスジェンダーのカミングアウトをめぐる困難の存在を示していると言えるのではないだろうか。

本研究のインタビュー調査では，限られた人数に限られた質問にとどまっており，そのバイアスなどについての考慮が不足していた。しかし，今後この点についての考察を行うと共に調査対象者の範囲をさらに広げ，より多くの経験を分析していくことで，より明確に非異性愛者のカミングアウトとトランスジェンダーのカミングアウトの差異を見出していくことが可能になると考える。

参考文献

福岡安則，黒坂愛衣，「トランスジェンダーを生きる－ある 40 代 MtF のライフストーリー－」，『日本アジア研究』第 4 号，pp.41-78，2007 年

堀江有里，「〈クローゼットから出ること〉の不/可能性－レズビアンのあいだに措定される〈分岐点〉をめぐって」，『解放社会学研究』22 号，pp.102-118，2008 年

岩田（井上）未来，「性をパフォーマンスする―『トランスジェンダー』へのインタビューから―」，『佛教大学大学院紀要社会学研究科篇』第 37 号，pp.37-54，2009 年

風間孝，「カミングアウトのポリティクス」，『社会学評論』53（3），pp.348-364，2002 年

金田智之，「『カミングアウト』の選択性をめぐる問題について」，『社会学論考』24 号，pp.61-81，2003 年

川坂和義，「『カミングアウト』の困難」，Gender and sexuality : journal of Center for Gender Studies, ICU 03，pp. 59-76，2008 年

小高良友，「ゲイ・カミングアウトの社会学をめざして：自分の事例をてがかりに」，『東海女子大学紀要』24 号，pp. 59-69，2005 年

Lal Zimman,"'The other kind of coming out' : Transgender people and the coming out narrative genre", Gender and Language, pp. 53-80, EQUINOX PUBLISHING, 2009

前川直哉，『〈男性同性愛者〉の社会史－アイデンティティの受容／クローゼットへの解放』，作品社，2017 年

三橋順子 a,「日本トランスジェンダー略史（その 2）－戦後の新展開」，米沢泉美編，『トランスジェンダリズム宣言　性別の自己決定権と多様な性の肯定』，社会批評社，2003 年
三橋順子 b,「日本トランスジェンダー略史（その 3）－1990 年代後半～現在」，米沢泉美編，『トランスジェンダリズム宣言 性別の自己決定権と多様な性の肯定』，社会批評社，2003 年
森山至貴，『LGBT を読みとく－クィア・スタディーズ入門』，ちくま新書，2017 年
ロディ・ロバート，ロス・ローラ，上田勢子：訳，『わたしらしく，LGBTQ② 家族や周囲にどう伝える？』，大月書店，2017 年
三部倫子，『カムアウトする親子－同性愛と家族の社会学－』，お茶の水書房，2014 年
佐々木掌子，『トランスジェンダーの心理学　多様な性同一性の発達メカニズムと形成』，晃洋書房，2017 年
Vincent Keith，風間孝，河口和也，『ゲイ・スタディーズ』，青土社，1997 年
吉澤夏子，『女であることの希望　ラディカル・フェミニズムの向こう側』，勁草書房，1997 年